

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				観測	コメント
17 ノブト 信取 (池田町)	地区	ヌブウトウル *ヌプトウル	nup-utur	野・の間	そんな場所である。 {池田町史は「アイヌの名付けたヌプトルは大森一線と二線の対岸で、居辺に続く山と利別川の間地域を指したものである。」と書いている。}	山田	B	-
18 ノホリエンコ 登延頃 (留寿都村)	川	ヌプリエンコクハッ	nupuri-enkor-kus-pet	山前を流れる川 山・の鼻・を通る・川	地名ではエンコロ(鼻)で山崎のことをいうことが多い。 この川と尻別川の合流点の所に、尻別岳の山裾が突き出していて、その山崎の下を流れているのでこの名がつけられたのであろう。	永田 山田	B	-
19 ノホリハッ 登別 (登別市)	市川 駅 山岳 温泉	ヌプルペツ	nupur-pet	水の色濃い川	今では登別川の下流で見ると、殆ど自立たないが、幕末の諸紀行では、ここを通過して「川水白く流れ」、「川水黄色にして甚だ濁る」と書かれている。当時は温泉水がひどく流れていて目立ったのであろう。 {地獄谷からの湧出した源泉が、その下流の登別川まで白濁した水を流しているという。}	山田	A	
20 ノヤ 農屋 (静内町)	地区	ノヤサラ	noya-sar	ヨモギ・草むら	つまりヨモギの生い繁った原の意であつたらう。ヨモギはアイヌ時代には魔を払う植物として大切にされたためか、所々にノヤのつく地名がある。	山田	B	-
21 ノヤウシ 農野牛 (豊頃町)	地区	ノヤウシ *ノヤウシ	noya-us-i	ヨモギ・多い・所	-	永田	B	-

【八】

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				観測	コメント
1 ハ 波恵 (門別町)	川	ハイ	hay	イラクサ多き イラクサ	つまり繊維材料(hay)を採るイラクサの多い所だったという。 {新門別町史は「昭和25年頃までは、河口の台地から奥地の至る所にイラクサの群生地が分布していた。」と書いている。}	松浦 山田	A	
2 ハ 羽帯 (清水町)	地区 駅	ポニオフ *ポニオフ	pon-i-o-p	小へび多き所 小さい・それ・多くいる・所	旧図にはポニオフと書かれた場所。左の解はへびというのをはばかって、「それ(i)」と言ったもの。	永田 山田	B	- 「pon-i-o-p」解の方が自然な形と思われる。 -
		ポネオフ	pone-op	骨の・槍				

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				備考	コメント
3 パオマナイ (留辺蘂町)	川	ヌプリハオマナイ	nupuri-pa-oma-nay	山・の上手・にある・川	北見富士の上流側にある川。nupuri が略された形で名が残っている。ただし北見富士の方はタナシ(高山)と呼ばれ、川名の方はヌプリ(山)と呼ばれている。地名のできた時代差でもあろうか。	山田	B	-
4 ハクツ 泊津 (新冠町)	地区	ポロハクツ	poro-hatkut	大きなブドウコクワある所{?}	明治図ではハクツ(ポロハクツとも)とポンハクツの小流が並んで新冠川に注いでいる。永田解はハク(ヤマブドウ){ hat }、クチ(コクワ){ kutci クッチ}と並べたものだったろうか。 {土地の人は、ブドウのある沢と伝承しているという。}	永田 山田	C	?
5 ハコダテ 函館 (函館市)	地区	ハクチャシ	hak-casi	浅砦、小館 {浅い・砦}	-	永田	C	? どちらとも特定しがたい。
	川 駅 公園	-	-	-	函館は明治2年からの名で、それ以前は箱館であった。元来の箱館は、函館山の北斜面で入江(今の港)に面した土地の称で、室町時代に河野加賀守がここに築いた館が箱のように見えるので、呼ばれるようになったという。	山田		
6 ハシクル 馬主来 (白糠町)	地区 川	パシクル	{ paskur }	カラス	昔、アイヌが漁のため沖合に出て、霧が深くかかって方角を失った時、この沼の辺にカラスの啼く声がするのを幸いに、目当にし、ここへ上陸したことによる。	上原	C	-
7 ハシハツ 箸別 (増毛町)	地区 川 駅	ハシベツ パシペツ	pas-pet	炭・川	この川上に石炭が有り、よって名付く。	松浦 山田	C	- 諸説あり特定しがたい。
		パシペツ	pas-pet	石炭川 {消炭・川}	川中に大きな黒石があって炭のようだったため。今はこの岩はないという。	永田		
		ハシペツ	has-pet	柴木の・川	古い元禄郷帳(1700年)では「ハシヘツ」、津軽一統志の地図(推定1670年調査)では「ワシ別」である。それから見ると、もしかしたら、元来ハシペツで、それがワシベツと訛り、またパシベツとも考えられるようになったのかもしれない。	山田		
8 ハシリコタン 走古丹 (別海町)	地区	アシリコタン	asir-kotan	新しい・村	新村。根室アイヌ、チンペイの勢力が強かった時、別海のアイヌをここに移したという。 その時に新しい村ができたので、この称で呼ばれたものか。走古丹と書いて古くはアシリコタンと呼んでいたようである。	永田 山田	B	-
9 ハツカイ 抜海 (稚内市)	地区 駅 岬	パツカイベ	pakkay-pe	子を背負う・もの	人を負う所。この海岸の山際に、石を背負う形の大きな岩があるため。 現在抜海市街の南のはずれにある抜海岩がその名のもとであるという。	上原 山田	A	

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考		
		カナ表記	ローマ字表記				種別	コメント	
10 ハッサム 発寒 (札幌市)	地区 川 駅	ハシャム	-	-	桜鳥の如き鳥多きより。	松浦	C	?	-
		ハチャムペツ	hacam-pet	桜鳥・川	桜鳥多し。故に名く。松前氏の時ハツサブと訛る。	永田		-	
11 ハツタ 発足 (共和町)	地区	カムイハッタラ	kamuy-hattar	神の・淵 ^{フチ}	ここに昔神霊が住むためという申伝えがある。	松浦	B		-
					昔、鮭がこの淵に群集し、熊が来てこれを食べたため。	永田			
12 ハナサキ 花咲 (根室市)	地区 駅 岬	ポロノツ	poro-not	大・岬	花咲は鼻崎で即ち岬の意味。ポロノツの意識である。	永田	A		
13 ハボロ 羽幌 (羽幌町)	町 川 山岳	ハブル	{ hapur }	柔らかい	この海岸の磯地が格別軟らかかったため。 砂が柔らかなので名になった。 川尻は今港内なので浜でない。すぐ南の浜に行ったが、砂が柔らかとも思えないが、泥っぽいのが特徴。それが濡れるとぬるぬるして柔らかいとでもいったものか。	上原 松浦	C	-	-
		ハボロベツ	ha-poro-pet	流出{?}・広大の・川	この川の水が出る時は川尻の砂浜を潰決して大いに流出するため。	永田		?	-
		ハブオロオベツ	{ ? -oro-o-pet }	ウバユリの鱗茎{?}・そこ・に多くある・川	-	駅名		?	-
14 ハマトンベツ 浜頓別 (浜頓別町)	町	-	-	-	頓別村から大正10年中頓別村を分村し、昭和26年浜頓別町と改称した。広い頓別地域の中の浜側の土地という意。	山田	A		「頓別」参照。
15 ハマナカ 浜中 (浜中町)	町 湾	オタノシケ	ota-noske	砂浜・の中央	訳して浜中としたのであろう。元来の浜中は、浜中湾の西岸中央、霧多布の北の所である。 {現在の浜中町浜中はアシリコタン(新しい・コタン)と呼ばれていたという。}	山田	A		
16 ハママス 浜益 (浜益村)	村 川 山岳	-	-	-	元来増毛であったが、増毛の名が北に移ったため、浜の字を附したもの。 {増毛については別掲。}	永田	B		?
		アマムスケ	amam-suke	ヨク 穀物を・煮る	ここと同名(増毛のこと)の地があったので、浜の字を冠して当所の地名とした。 昔、判官公がここで飯を炊いたという。 浜の字が付いて長くなったので、アイヌがそれを元来の地名と考えて言葉を当てたものの聞き書きだったろうか。	松浦 山田			

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				備考	コメント
17 ハヤキ 早来 (早来町)	町 駅	サクルペシペ	{ sak-rupespe }	夏・越える沢道	サクルペシペの上部を採って早来(サクル)の字を当てたのが始まり。	駅名	C	-
		サクル	sak-ru	夏・道	旧図には山越えて厚真町に至る道が描かれており、古くからの交通路と思われる。もしかしたら、ただ sak-ru とも呼ばれていて、当て字されたのかもしれない。	山田		-
18 ハラウ 原歌 (島牧村)	地区	パラオタ	para-ota	広い・砂浜	島牧村西部の海岸地名。オタは北海道西南部では「うた」に訛り、「歌」の字を当てられることが多い。	山田	B	-
19 ハラグチ 原口 (松前町)	地区	パラコッ	para-kot	広き ^{タニ} 溪間 広い・谷地	この沢の辺が広い溪間であったため。 コッは多くは凹地をいうが、河谷という意味にも使われた。	上原 山田	B	-
20 ハラト 茨戸 (札幌市)	地区 川	パラト	para-to	広い・沼	茨戸川が発寒川下流の別称であった。発寒川下流は砂山(昔の石狩湾海岸砂丘)の東下を流れているが、そこが札幌北部大湿原の終わりで、昔は川筋の至る所が沼になっていたのだという。その川口近くがパラト(広い・沼)だったので、そのため茨戸川と呼ばれた。 {旧図にもその様子が描かれているという。}	山田	A	
21 ハリウス 張碓 (小樽市)	地区 川 駅	ハルウシ	haru-us	食料・群生する	銭函を過ぎてから道が山側へ大きく迂回している所の大沢が名のもとである。オオウバユリ、ギョウジャニンニクなどの植物の食料が生えている沢のこと。 {現在も山菜の採集地として知られているという。}	山田	A	
22 ハルシナイ 春志内 (旭川市)	地区	ハルウシナイ	haru-us-nay	食料・群生する・沢	アイヌの人たちが好んで食べたギョウジャニンニクやオオウバユリが群生していた所の意。同名が諸地に多い。 {実際にギョウジャニンニクなどが沢山生えている沢だという。また、松浦氏は「この所は、下る者も上る者もここへ食糧を置いておく所なので、名付けられた」と書いている。このハルシナイから下流は激流であるため、丸木舟を空舟にして上下させたり、上流下流別な丸木舟に乗り換えるため、多くはここで宿泊する場所が多かったという。}	山田	B	-
23 ハルタ 春立 (静内町)	地区 駅	ハルタウシナイ	haru-ta-us-nay	食料多き沢 食料・を採る(掘る) ・いつもする・沢	この沢にセトマ(和名ツルボ)が多くあり、アイヌが採って食べた。また、クロユリも多くあったが今はすべて無い。	永田 山田	B	-

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				確定	コメント
24 ハルト 春採 (釧路市)	地区	ハルウトル	{ haru- ? }	食料とする草・沼 { ? }	クロユリ、エンゴサク等の草が多かったため。 ウトルに沼の意があるか疑問。せいぜい utor (側面)と 解すべきか。	松浦 山田	C	? -
		ハルトウル	haruturu	向う地				
	アルトロ	ar-utor	向こう側の・側面	永田 山田	?			
25 ハ ロウ 芭露 (湧別町)	地区 川 峠	パラ	par	口	芭露川の口がこの辺での大きい川口だったのでこの名 で呼ばれ、それが川の名にも使われたのではなからう か。	山田	C	-
		パロ	paro	その口				
26 ハンケイ 蟠溪 (壮瞥町)	地区 温泉	パンケユ	panke-yu	下の湯 下流側の・温泉	少し上流にある北湯沢温泉のペンケユ penke-yu (上流 側の・温泉)と対称した形でこう呼んだのであろう。	永田 山田	A	
27 パンケ (幌延町)	沼	パンケト	panke-to	下流側の・沼	サロベツ川本流の東側に二つの大きな沼が南北に並ん でいる。だだっ広いヨシ原の中にある広い円形の水溜まり である。	山田	A	
28 パンケウタシナイ (歌志内市)	川	パンケオタウシナイ *パンケオタシナイ	panke- “ota-us-nay” { panke- “otas-nay” }	下流側の・ウタシナイ川(砂浜が ・ついている・川)	-	山田	B	-
29 パンケウレイ (音更町)	川	パンケウレイ	panke-“ ure-toy ”	下の赤土 {下流側の・ウレイ(赤・土)川}	川筋に赤土が多く出ているという意であらう。	永田 山田	B	-
30 パンケオイヤンペ (今金町)	川	パンケオイヤンペ *パンケオイヤンペ	panke- “o-ican-un-pe”	下流側の・オイチャヌンペ川(川 尻に・鮭鱒産卵場 がある・もの (川))	-	山田	B	-
31 パンケオタスイ (新得町)	川	パンケオタスイ	panke-“ ota-suy ”	下流側の・オタスイ(砂・穴)川	読みにくい地名なので日高の萱野茂氏に相談したら、オ タスイなら沙流川筋の額平川にもある。ぼろぼろな砂岩に スイ(穴)があってその名がついたと語られた。	山田	B	-
32 パンケチン (音更町)	川	パンケチン	panke-cin	下流側の・チン(獣皮を枠に張 って乾すこと)川	その乾し場の所の川の意であらう。	山田	B	-
33 パンケトプシ (足寄町)	川	パンケトプシ *パンケトプシ	panke- “top-us-nay”	下流側の・トプシ川(竹が・ 群生する・川)	利別川西岸にパンケ(下の)、ペンケ(上の)のトプシ川 が並流して注いでいる。	山田	B	-

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				確証	コメント
34 パンケナイ (歌登町)	地区 川	パンケナイ	panke-nay	下流側の・川	幌別川に北から注いでいるのがパンケナイ川で、南から入っているのがペンケナイ川である。ふつう、パンケ、ペンケは並流する川につけるが、ここでは対岸になっている川の名になっている。この二川はこの辺での目立つ大支流であるからであろう。	山田	A	
35 パンケニコロ (新得町)	川	パンケニコロペツ	panke- "ni-kor-pet"	下流側の・ニコロ川(木・を持つ・川)	カムイロキから十勝川を少し上がると、西側にパンケ、ペンケの二川が並んでいる。	山田	B	-
36 パンケヌーシ (日高町)	川	パンケヌウシ	panke-"nu-us"	下流側の・ヌーシ(豊漁・ある)川	沙流川源流に近い所にパンケ、ペンケのヌーシ川が並んで東から注いでいる。むやみに魚が捕れた川であったという。	山田	B	-
37 パンケベツ沢 (静内町)	川	パンケベツ	panke-pet	下流側の・川	本流(メナシベツ)を ^{サカノボ} 溯った所に注ぐ北支流。その少し上にパンケベツ(上流側の・川)が並流しており、それと対称してパンケベツと呼ばれた。	山田	A	
38 パンケベオッペ (剣淵町)	川	パンケベオッペ	panke-"pe-ot-pe"	下流側の・ベオッペ川(水・多くある・もの(川))	意味はよく分からない。水だらけの川とも読まれる。水量が多いというのか、小流がいっぱいあって水だらけという意なのかははっきりしない。	山田	C	-
39 パンケポロナイ (芦別市)	川	パンケポロナイ	panke-poro-nay	下の・大・川	旧記では簡単にパンケナイ(下の・川)とも書かれた。 {ペンケ(上流側の)幌内川に相對させて、下流側の幌内川の意味で呼ばれたとも考えられる。}	永田 山田	B	-
40 パンケモユパロ (夕張市)	川	パンケモユパラ	panke- "mo-yupar"	下流側の・モユパロ川 (小さい・夕張川)	二つのモユパロ(夕張川支流)が並流しているので、それにパンケとペンケをつけて呼んだのであった。	山田	A	
41 パンケヤーラ (南富良野町)	川	パンケヤラ	panke-yar	下の・破れ川	ヤラ(yar)は破れる(破れている)、すり切れる(すり切れている)の意。川口の辺でも水で崩れる川だったろうか。 ヤラはまた樹皮の意味にも使った。樹皮で曲げものの家具を作ったりしたので、それを採りに行く川であったのかも知れない。	永田 山田	C	-
42 ハンセイ 万世 (新冠町)	地区	マウ(ニ)ウシオロ *マウ(ニ)ウソロ	maw(ni)-us-i-oro	ハマナス・多い・所・の中	昔は万揃(マンソロエ)と呼ばれた。松浦図ではマウニシヨロと書かれ、永田氏は「マウニ・ウシ・オロ・コタン ハマナス・多き・中にある・村」と書いた。一つの案を書けば、マウニシヨロの「ニ」は略されても呼ばれたろう。マウ・ウシ(はまなす・多い・所)という場所の名前ができていたとすれば、それにオロがついて、マウウシオロ マウソロと略されて、万揃になったとも考えられないだろうか。 {かつてこの周辺にはハマナスが群生していたという。}	山田	B	-

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				確定	コメント
43 ハンナグロ 花 畔 (石狩市)	地区	パナウクル ヤソッケ	pana-un-kuru-ya -sotke	川下人の漁場{?}	ヤソッケ(yasotke)は少し分からないが、網漁場のことらしい。石狩川口の辺の石狩人の漁場の中に、パナウクル(神居古潭から下の人、和人流にえば中川の人。夕張人もその仲間らしい)の漁場があったので、その名があったのであろう。	永田 山田	C	? -

【ヒ】

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				確定	コメント
1 ピウ 比 宇 (新冠町)	川 山岳	ピウカ	piwka	小石川原	{比宇川が厚別川に注ぐ所は、広い小石河原が広がっているという。}	山田	A	
2 ピウケナイ (東川町)	川	ピウケナイ	piwke-nay	オン 襲い川 {?}	石が多くて流水が襲撃し怖るべき所。 旭岳の下から崖の間を流れて来る川で、大雨の時激流が下る川らしい。 {永田氏の書き方から類推すると piwki-nay (向かってくる・川)だったのかもしれない。}	永田 山田	C	? -
3 ヒウシナイ 緋牛内 (端野町)	地区 駅	ススウシナイ	{susu-us-nay}	ヤナギ・群生する・川	-	駅名	C	-
4 ピエ 美 瑛 (美瑛町)	町 川 駅 山岳	ピエ	piye	油 油っこい、油ぎっている	水源に硫黄山 注:十勝岳 があって、水が濁り脂のようだったため。	永田 山田	B	-
5 ヒガシカグラ 東神楽 (東神楽町)	町	-	-	-	神楽の東部という意味の名であらう。 {東神楽町史は「昭和 18 年神楽村から分村したとき、母村の東に位置することから名付けた。」と書いている。}	山田	A	「神楽」参照。
6 ヒガシカ 東 川 (東川町)	町	-	-	-	永田方正が忠別川を「チュフ・ペツ。東川。チュフカ・ペツに同じ」として旭川の名ができたが、この町名もたぶんこの説から生まれたものであろう。まずチュフ(cup 日、月)とチュフカ(cupka 東)をごっちゃにしているし、忠別川自身もチュク・ペツ(cuk-pet 秋・川)だったようである。	山田	C	「忠別」参照。
7 ヒガシモト 東藻琴 (東藻琴村)	村	-	-	-	藻琴川中上流の土地。網走が市となった時に、ここが分離されて独立の村となった。藻琴川の上流なので、我々が見れば南藻琴と呼びたい所であるが、なぜか東藻琴村と称したのであった。 {藻琴川にちなんだ名と思われる。}	山田	A	「藻琴」参照。

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				確定	コメント
8 ビクニ 美 国 (積丹町)	地区 川	ビウニ	-	小石の有る所	この浜辺が小石(原)だったためという。	上原	C	? -
		ポクウニ *ポクニ	pok-uni	蔭所{?}	-	永田		? -
9 ビシャベツ 毘砂別 (浜益村)	地区 川	ピサンベツ	pi-san-pet	石が・流れ出る・川	土地で聞くと、今でも大雨が降ると砂利が流れ下る川だという。	山田	B	-
10 ビセイ 美 生 (芽室町)	地区 川 山岳	ピパイロペツ	pipa-iro-pet	沼貝多き川 カラス貝・多い・川	「イロ」は「イロンネ」と同じく、「多くある」をいう。 ピパのある地名で一番多いのはピパ・ウシ(pipa-us-i) であるが、ピパオイ(pipa-o-i)もある。ピパ・イロはここで しか見ていない。とにかく、ピパイロに美生の字を当て、後 に読み方がビセイに変わった。	永田 山田	B	-
11 ヒダカ 日 高 (日高町)	町	-	-	-	以前は ^{ウシャツ} 右左府村と呼ばれていたが、昭和18年、日高村 と恐ろしく大きな名(国名「日高」は、「土地南向きにして靄 (もや)等も早く相晴れ、天日を早くより仰ぎおり候こと故」 という松浦武四郎の国名建議書により付けられた)に改 められた。右左府はウサブ(u-sap 互いに・流れ出る)の 意か。(萱野茂氏による)	山田	A	和名と思われる。
12 ピッシリ (幌加内町)	山岳	ピッシリ	pit-sir	石の・山	はっきりしないが、言葉はこう読まれる。	山田	C	-
13 ピップ 比 布 (比布町)	町 川 駅 山岳	ピピペツ	pipi-pet	石のごろごろしている・川	左の転訛か。ピプあるいはピピともいったという。 (pipi-pet pippet pip)	知里	C	-
		ピオフ	{ pi-o-p }	石の・多い・所	この付近で比布川の河床に石が多くあるからであろう。	駅名		-
14 ヒトマイ 人 舞 (清水町)	地区	ニトゥオマフ	nitu-oma-p	寄木川 寄木・ある・もの(川)	明治29年図では、地名はニトマフ、川名はニトマイとな っている。アイヌ語の地名では、-p も-i も共に動詞に付い て名詞の形をつくる語尾で、同じ地名をどっちをつけてで も呼ぶことが多い。	永田 山田	C	? -

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				確定	コメント
15 ピハイ 美唄 (美唄市)	市 川 駅	ピパイ	pipa-i	沼貝川	ピパ(沼貝・からす貝・川真珠貝)は昔は食用に供し、殻の厚いものは穂を摘むのに使ったので、ピパのつく地名は全道に多い。ここは古くからピパイで、元来は美唄川の名であったろう。ただし、永田解の形は、イ(i)という語尾は名詞の後につかないので説明としては変だ。	永田 山田	C	? -
		ヒハラマナイ ピパオマナイ	pipa-oma-nay	カラス貝・ある・川	(文法的には)自然な形である。 {ただし松浦図では、美唄川ではなく、現在の奈井江に相当する場所にある川にヒハラマナイと書いてあるという。}	松浦 山田		?
		ピパオイ	{ pipa-o-i }	カラス貝・多い・所	母音が二つ続くとその一つを落として呼ぶことが多いのでピパイとなる。巧い説である。 {山田氏の解説は、o-iと母音が続くのでoが落ちて pipai になるという意味と思われるが、知里「アイヌ語入門」ではその用例は確認できない。}	駅名 山田		-
16 ピハウ 美葉牛 (北竜町)	地区 川 峠	ピパウシイ *ピパウシ	pipa-us-i	カラス貝・多い・もの(川)	{今も沼貝があるという。}	山田	A	
17 ピハウ 美馬牛 (美瑛町)	地区 川 駅	ピパウシイ *ピパウシ	pipa-us-i	カラス貝・多くいる・もの(川)	{今は沼貝の存在は確認できないという。}	山田	B	?
18 ピビ 美々 (千歳市)	地区 川 駅	ペッペッ	{ pet-pet }	川・川	支流が多く、屈曲していたため。	永田	C	? -
		ペペ	{ pe-pe }	水・水	あるいは、これなどであったのかもしれない。 {ペペについては、「水量の多い川」だとか「二つの川が一つになり流れる川」だとか「枝川がたくさんあり、また、その川がヌタブ(湿地)の中に入って、どこが川なのか判然としないが、またその先は川が流れ出しているような川」など、色々な解釈があるようである。}	山田		? -
19 ピフイ 美笛 (千歳市)	地区 川 峠	ピプイ	pi-puy	水無沢の{?}エンゴサク	ピに水無沢などの意味はなさそうである。あるいは pe「水」の転訛かもしれない。プイの方は「エゾノリュウキンカ(ヤチブキ)」、「穴」、「藪」、「ぼこんとした小山」などの意。それらの組みあった地名らしいが、今のところ見当もつけられない名である。	永田 山田	C	? -
		ピピオイ	pipi-o-i	小石原{?}にある・もの(川)	この川は自らが運んで作った石原の州を貫いて、支笏湖に流れ込む。	増補千歳市史		? -

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				磯谷	コメント
20 ピカ 美深 (美深町)	町 駅 峠	ピウカ	piwka	石原	天塩川の砂利河原の所がピウカの名で呼ばれていて、それがこの辺の名となったのではなからうか。	山田	B	-
21 ピホ 美幌 (美幌町)	町 川 駅 峠	ピポロ	{ pi-poro }	石・多い	小石多くある。	松浦	C	- どちらとも特定しがたい。 -
		ペポロ	{ pe-poro }	水・多い	当地は多くの清流が合流して水量が豊富であるから名づけたものだという。	網走市史		
22 ピホ 美幌 (広尾町)	地区 川	ピポオロ *ピポロ	“ pi-po ”-or	小石の有る 小さい石・の所	ここは、川尻やその付近が石ころだらけの土地である。	上原 山田	B	- 上原解の方が自然な形と思 われる。 ? -
		ピポロ	“ pi-poro ”	大岩{?}	この辺は大岩石が極めて多い。	永田		
23 ピマン 美蔓 (清水町)	地区	ピパウシ	pipa-us-i	カラス貝・多くいる・もの	元来は美蔓(ピパウシ)村と呼ばれた旧村名からの名残りであろう。十勝川北岸のこの地帯には、いくつもピパウシという川が並んでいて、それらによって付けられた村名だったろう。初めのころはピパウシと呼んだらしいが、それでは一般に読めないので、音読みで「びまん」となったものか。	山田	B	-
24 ピヤ 美谷 (瀬棚町)	地区	ピヤ	pi-ya	石の・岸	ここは丸い石の浜である。磯谷にも同名の土地があり、そこも「ごろた石」の浜だったらしい。	山田	A	
25 ピヤ 美谷 (寿都町)	地区	ピヤ	pi-ya	石の・岸	ここの海岸は護岸で昔の姿が失われているが、浜を見るとごろた石の所が多い。土地の人に聞くと「この部落ほど玉石のごろごろしている所はない。昔はひどい道路だった」という。ピヤは砂浜に対して、石のごろごろした海岸をいった言葉だったようである。	山田	A	
26 ヒラガ 平賀 (門別町)	地区	ピラカウコタン	{ pira-ka-un -kotan }	ガケ 崖・の上・にある・村	今は西岸が主体であるが、昔は東岸の大崖の上の大部 落であった。	山田	A	
27 ヒラギシ 平岸 (札幌市)	地区	ピラケシ	pira-kes	崖・端 崖・の末端	アイヌ語地名一般の例からいうと、川沿いの長崖の始 まる所(上流側)がピラパ(pira-pa 崖の・上手)で、その 終わる所がピラケシである。札幌の平岸もそこについた名 が拡がって地名となったのであろう。あの崖のほととの末 端は幌平橋に近い所である。そこから出た名か。あるいは もっと上の崖の切れ目であったのかもしれないが、今で は確かめようがない。	永田 山田	B	-
28 ヒラギシ 平岸 (赤平市)	地区 駅	ピラケシ	pira-kes	崖の下手 崖・の末端	この辺は川崖が続いているので、どこがそこだったの か分からない。	駅名 山田	B	-